

20th century literature in America

**AN AGE OF
CRITICISM**

1900~1950

by William Van O'Connor

二十世紀アメリカ文学研究叢書

批評の時代

——現代アメリカ批評文学——

1900~1950

大竹 勝・皆河宗一 共訳

アメリカ学会文学部会責任編集



批評の時代

昭和34年3月31日 初版発行
昭和36年10月10日 再版発行

¥ 350

訳者 大竹 宗一
皆河

発行者 竹下 みな

印刷所 三裕印刷有限公司
製本所 株式会社小林製本

発行所 株式会社 評論社

東京都千代田区神田神保町2 / 16
電話 (331) { 8020
(301) 9418 振替東京 7294
1850

20世紀アメリカ文學研究叢書

批評の時代

—現代アメリカの批評文学—

ウィリアム・ヴァン・オカーナー

大竹 勝・皆河 宗一

共訳

＊

アメリカ学会文学部会
責任編集



評論社

Title : An Age of Criticism
Author : William Van O'Connor
Original Copyrighted by Henry Regnery Co.
Japanese Copyrighted by HYORON SHA
through arrangement with Henry Regnery Co.

序 文

これからくりひろげられる各章の要旨、つまり各章をしめくくる観念があいまいでないことを、わたしは望んでいる。恐らくプラトンのいう「本質」エッセンスすなわち観念としてのみ、純粹な文学批評というようなものは存在するのであるが、存在するかぎりでは、純粹文学批評は、文学作品の構造、もっと詳しく言えば意味や感情がそれにふさわしく想像され、創作されている形式の中に発見される様式に関心をもっている。ヘンリー・ジェイムズとか、ジョーエル・スピングアンとかいうような批評家たちは、何とか純粹批評に密着することができ、あるいは少くとも、他の批評家たちに対して、これこそ彼らの本質的業務であることを力説し得ているし、「新批評」ニュー・クリティシズムと呼ばれる運動に関係のある若干の分析的批評家たちは、これを彼らの第一の役目とするよう努力して来た。不幸にして純粹批評家の越えてはならない限界はたやすく定められないのである。文学は、形式ばかりでなく、観念（すなわちある美学者たちが「生命価値」と呼ぶもの）に関心をもっており、それらのものが、文学的对象から、哲学とか、政治とか、倫理学とか、社会問題とかの方向へ引きはなす力を働かせるのである。このようなわけで、ひとは、先ず第一に環境とか、倫理とか、政治とかに注意を集中して、文学作品を

主として、たとえば国民精神の検討とか、ある種の倫理的、政治的、社会的見解の釈明とか、弁明とかを始める出発点として利用するような批評を見出すのである。そのような場合、文学作品は、一つの主義主張に役立っているとか、役立っていないという理由から、しばしば賞讃されたり、けなされたりして、文学的対象としては、消滅してしまう傾向がある。けれどもそのような批評が、文学作品そのものに密着し得ている場合には、その価値は、環境の中の要因や、倫理的体系の原則がいかにして文学作品を刺戟しているかを示すことにある。だからして、このような文学史の仕事は、いろいろな批評運動の一般的性格を記述し、特殊な方法から生じた成否の程度をできるだけよく観察することである。また、個々の批評家は、あれやこれやと一つの範疇にびったり当てはまるとはかぎらない——時として、彼は二三の異なったグループ、あるいは運動の中に姿を現わすこともあるのである。

このような歴史を書く際の、もう一つの問題は、一八九〇年代から一九二〇年頃までのアメリカ文学は、とくに群小作家が含まれていることだ。それは一種の薄明時代であるということである。「お上品な伝統」については、その独特な表現からも、あるいは自由主義的定見をもった二十世紀の作家によって解釈されているものとしても、詳細にして本格的な研究は出ていない。また、第一次世界大戦前のアメリカの作家に対する、十九世紀ヨーロッパの近代主義——とくに意識的に氣どった、世界主義的方面の近代主義——の影響についての詳細な研究は出ていない。さらにまた、イポリット・テーヌやフェルデナン・ブリュンチエールのようなフランスの作家へはほとんど全然注意が払われてい

ない。そのため、文学批評が、これらの主要な運動と感化力とによって影響されてきた様式を示そうとするひとはたれでもいろいろな誤謬に陥る危険がある。それらの誤謬は、今後のもっと詳細な研究によって明かになるであらう。

本書でわたしが述べていない、あるいは論じていない批評の作品は、大体において二つのグループに属している。すなわち、相当量にのぼる批評の見られる学問的、歴史的研究所、文学作品の分析批評、または細部にわたる研究とである。前者は量的に見て大して注意を払うことができないし、同様に分析批評の数もひじょうに多いので、主要文献と全般的問題しか取扱うことはできない。

この研究を書くにあたってわたしを援助して下さった人たちの中で、わたしはとくに、フレッドリック・J・ホフマン、ジョーゼフ・クウィート、ロバート・ペン・ウォーレン、セオドア・ホーンバーガー、ヘンリー・ナツシュ・スミス、ロバート・スピラーの諸氏に負うところが多い。本書の二章は、幾分異った形で「ニュー・メキシコ・クォータリイ」と「カレッジ・イングリッシ」にのったことがある。

ミネアポリスにて

ウィリアム・ヴァン・オカーナー

目次

序文

第一章	お上品な伝統	一
第二章	気取りと印象主義	三
第三章	写実主義と科学の庇護	五
第四章	有機的、表現的形式	二〇
第五章	アメリカの新しい意識	四四
第六章	新人本主義	五三

第七章	社会主義及び行動主義批評	一五
-----	--------------	----

第八章	精神分析と神話	一八一
-----	---------	-----

第九章	分析批評	二二
-----	------	----

参考書目	三六
------	----

訳者註	二四〇
-----	-----

あとがき	二五
------	----

索引	二七
----	----

批評の時代

一九〇〇年—一九五〇年

—現代アメリカの批評文学—

ガ
ー
ト
ル
ー
ド
と
ド
ナ
ル
ド
に
捧
ぐ

第一章 お上品な伝統

1

「お上品な伝統」という用語をたやすく、こぎれいに定義することはできない。ジョージ・サンタヤナ (George Santayana, 1863-1952) の造語らしいが、この用語は、アメリカの社会的慣習に関心をもつ批評家や小説家などによって、たちまちにして取り上げられるようになった。第一次世界大戦前後の時期になると、それは不名誉を表わす用語となった。シンクレア・ルイス (Sinclair Lewis, 1885-1951) は一九三〇年のノーベル賞受賞演説において、自由主義、写実主義作家たちがすでに公認の勝利を収めてのぞんで来た反動の敵として、ウィリアム・ディーン・ハウエルズ (William Dean Howells, 1837-1920) とお上品な伝統とを槍玉にあげることができた。けれどもハウエルズはその活躍した時代には、写実主義の勝利のために助力しており、エミール・ゾラ (一八四〇年—一九〇二年) のような小説家を認めることを(いくらか気がすまなかったらしいが) 主唱し、青年ステーション・クレイン (Stephen Crane, 1871-1900) を激励していたのである。ここでひとは、二つのお上品な伝統、つまり公平な歴史家によって存在するものと、ルイスやその同時代人によって神話化されたものがあるのではないかと疑い

出すであらう。それだからといって、ルイスの同時代人が自分たちの業績に、はなばなしい偉観を添えるために、全然仮想の敵をでっちあげているわけでないことはもちろんである。彼らはたしかに、お上品な作家と批評家の肖像を、いくらか奇怪なものに作り上げてしまったのだが、彼らの反対したグループは、それが同質ホモジニアスのものであるかぎりでは、アメリカの生活の、溢れるばかりの活気とか、商業化とか、画策や努力とか、アメリカ精神のこの部分から発展した理想主義の、現実的形式や實用主義プラグマティズム的形式とかを、文学に表現することを奨励しなかったことは真実である。ルイスが攻撃していたグループの多くの人たちは、第一流の文化人、知識人の一部と自任しており、他とは違った社会階級と任じてさえたのであった。大体において、彼らの支持した伝統はニュー・イングランド〔合衆国東部〕から出たもので、その中にはラルフ・ウォルド・エムスン(Ralph Waldo Emerson, 1803-82)の理想主義が、彼の後に続いた何世代かの文化人の手で修正されて入っていたのである。自分たちは文化の代表者で、判定者であるというこのグループの確信が、たとえ後の世代には尊大で、専断的に見えるとしても、自分たちは「内なる光」をたよりにエマスン流の信条に従っているのだとつねに信じており、自分たちは著しく道徳的であると見ている点は認めてやらなければならない。事実、他のあらゆるものに行渡っているといえる特徴が一つあるとすれば、それは彼らの道徳感である。審美的、知的、経済的、政治的考察は殆んど例外なく倫理的考察の光を浴びたのである。この事実は、文学の環境的要因であらうと、批評を書く場合の科学的手順であらうと、写實的に書くという決意であらう

うと、このグループの人々があらゆる問題を論ずる場合の、彼等独特の理想主義的調子と後世の読者たちには見えがちなものに強く働いていることは疑いない。

ウィリアム・モートン・ペイン (William Morton Payne) の編集した選集、『アメリカ文学評論』^{**} (American Literary Criticism) のほとんど全部の論説には、そのような調子が溢れている。それはたとえば、批評の科学的基礎を誇りにしていたエドモンド・クラレンス・ステッドマン (Edmund

* このグループを概括する困難の一つは、適切に「お上品」だとレッテルをはれるような、もろもろの特徴について、考え方が一致しなかったということである。

** (ニュー・ヨーク市、ロングマンズ社、一九〇四年) この論集は、一八五〇年以前に生れた批評家の作品だけを収めたものであるが、十九世紀後期の批評の主な系列を見るには便利である。ペインの回想するところでは、エドガー・アラン・ポオは、ポオにも唯一人の師匠はあったという意味で、サミュエル・テイラー・コウルリッジの流をくんでいた。初期の「ダイアル」誌(一八四二年—四四年)は、エマスンやマガレット・フラーやジョージ・リップリーに、彼等の理想主義、伝統主義への彼等の性急な敵意、知的発見への彼等の熱意や、政治改革にたいする彼等の情熱のための発表機関となった。また、ジェイムズ・ラッセル・ローウエルは鋭い知性と、時折りの価値ある観察を持っていたにも拘らず、批評の方法と方向を欠いていた。シドニー・レニエーは詩と小説の研究に科学的基礎を与えるため、その成功は限られたものに過ぎなかったが、努力したし、ハミルトン・ライト・メイビーのような批評家は「われわれが、われらのホーマーやプラトン、われらのダンテ・シェイクスピアやゲーテに触れておくように奨励することにあくことを知らなかった」という。

Clarence Stedman, 1833-1908) による『詩の性質と要素』(The Nature and Elements of Poetry, 1892) からの抜萃にも明かである。

名声というものはこれまで、何らかの信念の形で得られて来たもので、二流詩人でさえ、他のことが等しければ、自己の芸術、自己、「芸術すべての効用」についての、ある種の確信の度合に依じて、それぞれある程度の成功を勝ち得て来た。神とか、正義とか、国民性とか、宗教とか、人間性などを穩かな形で信ずることは、第一流の人々の特徴をなしているもので、諸君はよく知っておられる……ホーマーは、神をあらゆる人間活動の鼓舞者、調整者と快活に認めている。

また批評家ウィリアム・デーン・ハウエルズの『批評と小説』(Criticism and Fiction, 1891) からの抜萃にも、この調子は明かである。ハウエルズは、文学は真実を語るべきであると信じ、彼の断定は、「写真主義とは材料を正確に取扱うこと以上のものでも、それ以下のものでもない」ということであった。ハウエルズはシェイクスピアについて次のように書いている。

さらにまた、汚れを知らぬ、理想的善を必要とするまじめな青年の心には、巨匠たちの取った態度は、つねに歎かわしいことであつたに違いない。彼らはたびたび、自ら進んで劣俗な連中の余暇を

楽しませ、魂に対する使命を一部しか果さないでいるように見える……時には、この個人的には知られていない人（シェイクスピア）の良心ほど啓発され、あれほど作品の中へ引きこもっていて、後世の最も強い好奇心をあれほど知らないでいるような良心の持主は、ごく少ないようであるが、また時には、彼はその粗雑さ、上品さ、不完全な共感においてひたすらエリザベス朝的であるように見える。

ハウエルズが「アトランティック・マンスリー」誌に関係していた頃（一八六六年—八一年）、彼のまわりには、写真主義の小説の主唱に没頭する一群の批評家があった。彼らの名目的な、あるいは意図的な写真主義の受取り方が、しばしばそれと反対の批評になる恐れがあり、実際にはそうなっている在り方を観察することは興味深い。このようにして、トマス・サージェント・ペリー(Thomas Sergeant Perry, 1845-1928)は、ツルゲネエيوفの憂うつは、「文学を全くの慰安にしまっている重要な諸法則に対する、彼の片意地な軽べつよりも、(むしろ)何か個人的な直接原因によって説明することができると言っている。さらに彼は、「絶望は読者の望んでいるものではなく」「むしろこの世の、苦しい低級な心配事」から逃避する方法なのであると説明している。文学は人間の苦闘の報酬たる必然的な進歩を示すべきであるとするのである。ペリーや若干の彼の仲間は、小説が実世間を描くことを望んでいたであろうが、適切な教養のない人の意味するきびしさを解釈し、したがってそれ